

いもの子の歌

障害者が地域で暮らし、働くために

●第10回 君の声を聴きたくてーどんなときも

■「働きたい」ねがいの広がり

1987年に障害のある仲間たちの卒業後の行き場として6名から始まったいもの子は、現在230名を超える仲間が利用しています。仲間が主人公として自分らしく生きることを支援するいもの子の実践は、仲間たちの声に耳を傾け、さまざまな労働実践を積み重ねてきました。私は入職したとき、「どんなに重い障害をもついても働きたいというねがいがある」と先輩職員から教わりました。「働きたい」というねがいの意味は、年々深まり、広がり、多様化していることを感じています。

1994年に入職した私は、川越いもの子作業所で木工作業班に配属されました。木工の知識はなかったのですが、仲間がどんな作業に関わるのか、治具の工夫など日々考えて、実践していました。当時の仲間の工賃はひと月3000円、好きなCDを買うことができるお金、そんな時代が思い出されます。

木工作業はその後、木工の専門職を採用し、レーザープリンターを活用した土産品や記念品の作成など観光地川越に求められるような木工製品を作っています。

1997年、仲間の工賃アップをめざし、せんべい作業をおこなう第2川越いもの子作業所が始まりました。「次期作業所の作業種目をなににするか?」「賃金の向上につながる仕事はなにか?」という議論を職員や家族でたくさんして、第2川越いもの子作業所が生まれました。職員や家族の心配・不安をよそに、仲間たちはせんべいを焼き、味付けをし、ていねいに心を込めて包装をして、いもの子せんべいを生産していきました。彩の国優良ブランド品にも選ばれ、20年以上愛されるいもの子せんべいは、川越に根づき、全国各地に発送されています。

■第3いもの子作業所の誕生

2003年、その年の卒業生の行き場として、私のいる第2デイケアいもの子(現第3

習を受け入れていた方で、高齢のために仕事を辞める際にいもの子に製麺の機械と技術を提供してくれるというありがたい話をいただきました。一般就労をめざしたいけれど、まだ自信がないという仲間たちが集まり、うごん事業は始まりました。たくさん作ることでできるけれど、販売できるのだろうか? そんな心配もありましたが、これもまた、仲間たちのがんばりで払拭しました。

その後、製麺所のみならず、「作り立てのうどんを食べてもらいたい!」というねがいのもと、市内中心部に移動販売車を使ったお店を出すことができました。観光客で賑わう場所にあり、仲間の働く姿が直接社会とつながる場となっています。さらに別の移動販売車では、県内各地のイベントに出向き、うどんを提供しています。

2008年には、川越市が新たな公共施設を建設し、その一角で福祉喫茶を経営する法人を募集しました。JR川越駅の近くで1700人規模のコンサートホールがあり、集客と収入が見込める立地のため、いもの子も応募しました。ドリンクだけでなく、焼き立てパンを提供するという企画が採用され、川越市から委託されることになりました。川越市の担当課からも「いわゆる福祉事業にとどまらず、市民に喜んでもらえるものにしてほしい!」と住民サービスの機能を求められました。プレゼンから7年後の2015年、「カフェ&ベーカリーどんときも」が誕生、就労継続支援A型事業所が始まりました。そこに集った仲間は、「生活のために収入を得たい」「会社では無理をして、体調を崩してし



▲好きなものを並べて楽しむ活動

まった」「今よりステップアップしたい」「接客の経験を活かしたい」などさまざまなねがいをもっていました。そして、共通するねがいは「お客様にいいサービスをして喜んでもらいたい!」というものです。地域に根ざした、仲間たちがいきいきと働くお店は、多くの方に支えられ順調に運営しています。

■重度の人に合わせた活動

いもの子には、毎年特別支援学校を卒業した仲間たちが入社します。それぞれの事業所で、仲間たちに仕事を合わせて、さまざまな工夫をして、環境を整えて実践してきました。多くの仲間たちは、自分らしく働く姿を



▲筆者中央

第3川越いもの子作業所

湯浅俊二

■地域に根ざした働く場

川越でうどんの製麺所を営んでいた社長さんがいました。特別支援学校の生徒の現場実

見せていますが、仕事にはまらない仲間たちもいました。2013年に川越いもの子作業所に絵や歌やダンスなど「好きなことをとことん」とりくむスタジオI・M・Oができ、重度の障害をもつ仲間の表現活動の場となりました。リサイクル部のBさん(女性)は、旅行に行った際のおみやげ物店でいろいろなお品に気持ちは向けていたり、自宅では小さな人形の玩具で遊んだり、ピースをたたみに並べて見とれている姿を見るなかで、作業所でも好きなものやきれいなものを並べたり、集めたりして楽しむとりくみを始めました。やがてそのコレクションは一つの作品となり、他の仲間たちの作品と併せて美術館での展示会が開催されました。社会に発信されたBさんの作品は、多くの人の足を留めさせ、共感を集めていました。

この表現活動はロックを通して障害のある人たちの思いを表現するI・M・O楽団を生み出した。CDの作成やライブ活動のほかに、大ホールを借りた「川越春一番コンサート」を企画運営するようになりました。仲間たちがポスターやチラシを配布し、チケット売り、そして当日の運営までもこなしています。

また、川越は観光地であり、老舗のお菓子屋さんが多く点在し、「川越芋(紅赤)」を使ったお菓子が作られています。いもの子の名の通り芋を作ろうと、3年前から畑を借りて川越芋を作るようになりました。そしてその芋を川越のお店に買ってもらっています。

そのほかにも、施設外でロジスティクスやクリーニングの作業に集団で出かけたり、特別支援学校の清掃、市の広報誌配布、Tシャツ